

[資料] 安政江戸地震に関する新史料『印東家文書』

公益財団法人地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター* 松浦 律子

防災情報サービス株式会社† 中村 操

弘前大学大学院地域社会研究科‡ 小田桐 睦弥

A New Historical Material on Ansei Edo Earthquake in 1855 Written by Mr. Ochu Into of Kawagoe Clan

Ritsuko S. MATSU'URA

Earthquake Research Center, ADEP, Chiyoda Build. 8F 1-5-18, Sarugaku-cho, Chiyoda-ku,
Tokyo 101-0064, Japan

Misao NAKAMURA

Information Service for Disaster Prevention, 230-7, Miroku-cho, Sakura,
Chiba 285-0038, Japan

Mutsumi ODAGIRI

Regional Studies, Graduate School of Hirosaki Univ., 1, Bunkyo-cho, Hirosaki,
Aomori 036-8516, Japan

We were informed that there is an unpublished document written by Mr. Ochu Into of Echizen Matsudaira Kawagoe clan right after Ansei Edo earthquake in 1855. With the permission of his descendant, here we publish this document. Unfortunately, the information in the document was limited to damages around the Edo castle and some rumors which might be circulated around many clans close to the Tokugawa Shogunate after Ansei Edo Earthquake. However, it tells us that what and how much the federal administration knew on damage of the quake right after it. We will continue to collect new information on historical earthquakes.

Keywords: Ansei Edo Earthquake, Damage around Edo Castle, Historical Materials, Echizen Matsudaira Kawagoe Clan.

§1. はじめに

安政江戸地震は 1855 年 11 月 11 日(安政二年十月二日)の夜 9 時半頃に発生した、規模は M7.0 程度の地震である。近世の江戸市中に最大の被害をもたらした被害地震である。我々は十年以上安政江戸地震に関する史料の解析を行ってきた[中村・ほか(2002, 2003, 2005), 松浦・ほか(2008), 中村・松浦(2011)]. 先頃中村・松浦(2013)で示した広域震度分布図からは、震源域は、東京湾北西端、千葉市の真下辺りの太平洋プレート内或いは太平洋プレートとフィリピン海プレートとの境界に発生したやや深い地震の可能性が極めて高いことが明らかになりつつある。

関東地方はプレートが三枚重ねである上に、堆積物が厚く面積が広い関東平野があるために、何処の地震であっても被害は地盤の影響や直近のプレートの深さの影響を色濃く受ける。歴史地震の被害から震源域を判定するのが困難な地域である。そこで既往の公表済み史料を全て解析したことに加えて、今まで震度推定や揺れ具合を判断できる良い史料がない地点に関する情報が新しく加わらないか、常に注意してきた。

今回、新聞に我々の安政江戸地震の解析結果が紹介された機会に、^{いんとう}印東家から、幕末に川越藩松平

* 〒101-0064 東京都千代田区猿楽町 1-5-18 千代田ビル 8F
電子メール: matsuura@adep.or.jp

† 〒285-0038 千葉県佐倉市弥勒町 230-7

‡ 〒036-8516 青森県弘前市文京町 1

家の藩士だった当主の印東應中氏が安政江戸地震に関して書いた覚え書きがあり、我々が拝見可能というご連絡を頂いた。

1855年の川越藩は、次々と外国船が来航するなか、三浦半島の警固役に加えて品川第一台場の担当となって、出費も大変であった。1824年生まれの印東應中氏は地震時には数え三十二歳の働き盛りである。1851年相州警備のため三浦半島の鴨居に赴任して警衛、その後川越に帰って監察職、1857年に品川砲台の守衛、1866年前橋城再築の作事奉行、1867年勘定奉行を勤めた人物である[前橋市(1973)]。地震時は監察職で本拠地は川越であったと推測されるが、江戸藩邸に居たようである。当初現在の印東家の御当主は文書が殆ど読めないのが、安政江戸地震のことである以外は内容が不明であった。もし川越や陣屋のあった前橋の被害が判ったなら新情報である。我々も大変期待して、印東家に伺って文書を拝見させて頂いた。

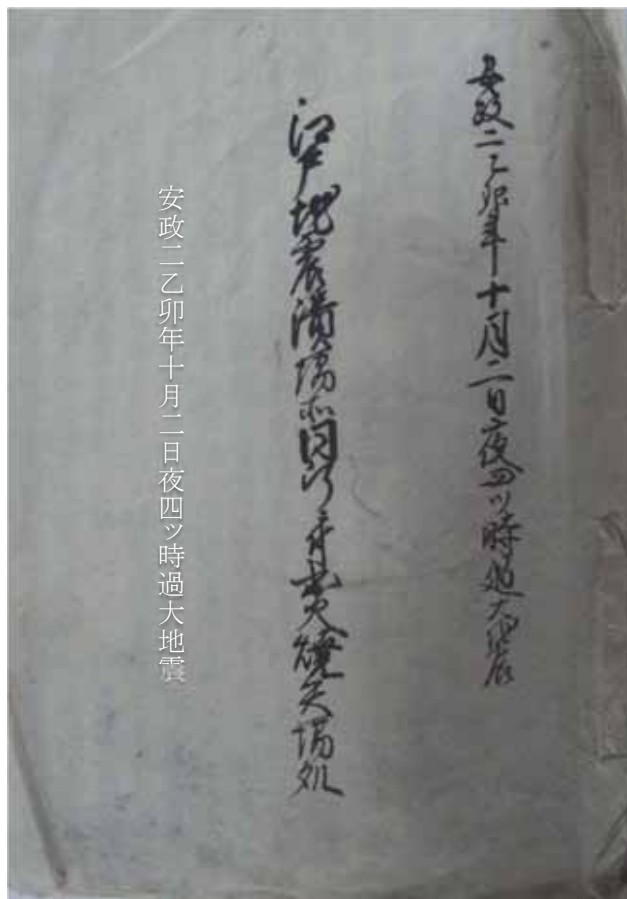


写真1. 印東應中文書の表紙
白字は読下文

Photo 1. Cover of the Into's document

§2. 文書の体裁と内容

文書は、半紙大の和紙を二つ折りにして紙縫りで綴じたもので[写真1]、文字は鮮明であった。判読能力が高くない松浦と中村でも、文書が江戸市中の話

であることが判ったが、読み間違いを防ぐために、小田桐が主として読み下し文を作成した。ここに、文書を所蔵する印東家の許諾を得たので、記述内容をまとめた図表[表1, 図1]を、史料の各頁と読み下し文[図2~5]と共に示す。

この文書には、表1と図1に示すように主として大名の上屋敷など江戸城周辺の武家地の火災と潰れの被害状況が書かれている。特に大名小路あたりの被害が詳しい。また、武家屋敷の外側の被害や、焼失や倒壊によって外からも判るようになった被害記述が殆どである。図1には塀や石垣等の被害は震度5以上と判定される所の大凡の位置を黄色い三角で示した。表1は文書での登場順に各地点の被害状況をまとめた。

文書にはいくつか誤字があり、「丹羽守」はおそらく丹波守のこと、主殿頭が「主殿守」、大輔が「大夫」となっている。「伊藤播磨守」は、場所から考えて伊東家の屋敷を指すと解釈して図1に示した。文書中で誤字或いは当て字と考えて変更した部分は表中では赤字と下線で示した。

史料から都市の場所をピンポイントで推定するのは、いつも難しいものである。特に幕末の江戸のように目まぐるしく役宅の主が交代した場合は、注意が必要である。例えば本文2頁目の「辰の口表門丹羽守御役屋敷不残焼失」の部分は場所の特定が難しかった。丹羽守は丹波守の当て字と解釈した。「丹波守」の屋敷といえば安政当時は鳥居丹波守の旧宅(現三菱UFJ銀行本店)を指す場合が多い。安政江戸地震時にはまだ丹波守でなかった平岡丹波守は除外できるが、松本藩の松平丹波守か、あるいは丹後守の可能性も検討する必要がある。辰の口表門は和田倉門のことであるが、門自体に関しては「大損」と次に記されているので、「辰の口表門」は方面を表すと解釈した。そうすると旧鳥居丹波守の屋敷では和田倉門から飛び離れ過ぎた記述となる。この続きの記述は、松本藩の松平丹波守上屋敷が「不残焼失」と解釈するのが自然である。図1にはこの解釈を示した。しかし松本藩邸の向かい側の北町奉行所では、長屋が潰れたが焼失していないことが『安政乙卯武江地動之』に記されている。現在の東京駅北口になる松本藩の丹波守邸の火災は、これまで解析した史料には書かれていなかった。向かいの奉行所には延焼していないものの、松本藩邸が全焼であったなら、これまでの史料では判らなかつた新情報である。しかしどの史料であっても言えることではあるが、今回の解釈あるいは本史料の内容自体が全て真実であると断定はできないことは、注意が必要である。

他にも火災の場所に関して絵図を含めて既知の史料をまとめた中村・ほか(2005)の結果と比較すると、江戸市中全てを網羅している訳ではないことが判る。信憑性が高いのは江戸城周辺の武家地に関する記

述に限られる。城から離れた火災は例えば「御蔵前の南側十町」がある。これを記述通り解釈すると図 1 に示すように現在の柳橋あたりとなる。これまで調べてきた史料に柳橋の大火事は書かれていなかった。これまで蔵前付近には小規模の火災しか判って居らず、北側にあたる駒形では「十町」の焼失が大げさでない火災があったことは判っている。この蔵前付近の火災に関しては、應中氏自身が見たものではなく、伝聞情報から、蔵前付近の火災を過大と誤認したのか、北側の駒形の大火災のことを南側と誤認した可能性が高い。

§3. 史料の情報と意義

表 1 と図 1 に示すようにこの史料から判るのは江戸城周辺の武家地と何か所かの江戸名所の被害状況だけで、町人地域のことは書かれていない。登場順序は、途中までは現在港区虎ノ門のホテルオークラとなっている川越藩上屋敷から登城する道順にほぼ沿っているので、少なくとも現在の桜田通りから日比谷公園、皇居外苑、東京駅、大手町辺りまでの江戸城周辺の千代田区南東部分に関しては本人が実見したことを記していると考えられ、末尾の「上屋敷ヨリ相廻ル」と整合する。

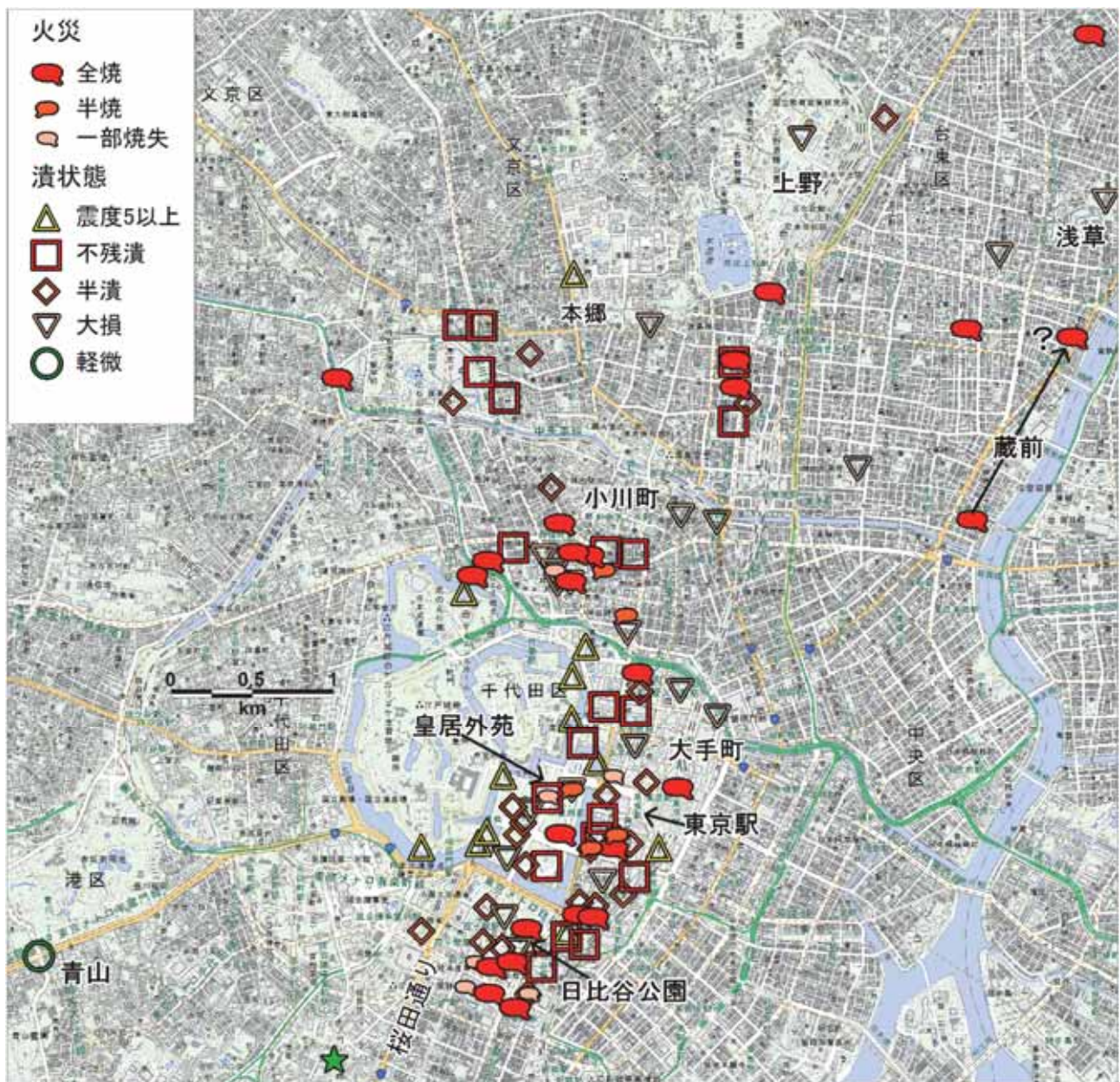


図 1. 印東家文書に記載された地点と被害程度

出発地の川越藩上屋敷は緑の星印で示した。背景は現代の国土地理院の 1/25,000 地形図である。蔵前付近の火災が記述通り南側の柳橋か北側の駒形か、→? で示してある。

Fig. 1. Distribution of damages and burned places in the Into's document
Green star is the resident of Kawagoe clan.

虎御門内、松平美濃守殿御上屋鋪、表御長屋一ト棟潰、其外處々損、幸橋御門内、亀井隱岐守殿少し焼、伊藤修理大夫殿不残焼失、松平時之助殿右同断

北條美濃守殿少し焼、南部美濃守殿不残焼失、松平薩摩守様御屋鋪御殿半分程潰、西表御長屋一棟焼失、有馬備後守殿不残焼失、丹羽長門守殿御玄關潰、阿部播磨守殿不残潰、松平肥前守様不残焼失、朽木殿御殿潰、小笠原佐渡守殿・板倉周防守殿半潰、表御長屋潰、松平大膳大夫殿西表土蔵潰、御殿半分潰、外桜田通、土手石垣三ヶ處崩、西丸御囲土塀・石垣共拾ヶ處崩、西丸大手脇御櫓崩、土塀半崩、西御丸大手大損、坂下御門大損、本庄近江守殿表御長屋半分程潰、牧野備前守殿表御長屋潰、松平玄蕃守殿表御長屋・玄關潰、松平伊賀守殿御長屋半分潰、内桜田御門通、御櫓・御多門崩、其外御櫓大損、松平下総守様不残焼失、松平肥後守様少し残、跡者大凡焼失、内藤紀伊守殿不残潰、表御長屋焼、酒井雅樂殿御殿不残潰、表御長屋少し残、本多殿御殿潰



図 2. 本文 1 頁目の写真と読下文

Fig. 2. The first page of the document.

御長屋共少し残、西御丸、御厩半分程潰、日比谷御門内、松平阿波守様御中屋敷半分程潰、松平土佐守様不残潰、牧野備後守様御殿不残潰

松平主殿守殿御玄關其外共潰、本多中務大夫殿不残焼失、永井殿御屋敷不残焼失、土井大炊頭殿半分程潰、松平右京亮殿半分程つぶれ
松平相模守様裏手半分程潰、遠藤但馬守殿不残焼失、小笠原佐兵衛殿表御長屋半分潰、半焼三有之、其外大損、松平誠之助様表長屋一棟潰、馬場先外火消屋敷潰、半欠焼失、松平相模守様御中屋敷不残潰、松平三河守様御囲土塀不残潰、少し残、松平内蔵守様裏手御長屋潰、増山河内守殿不残潰、久世大和守殿表長屋潰、阿部伊勢守殿横御長屋焼、傳奏屋敷少し潰、辰ノ口表門、丹羽守殿御役屋敷不残焼失、和田倉御門大損、御作事定小屋潰、酒井左衛門尉殿不残焼失、向屋敷・大手御門損、右手土塀大潰、御置蔵潰、小笠原殿御殿半潰、横表長屋潰、常盤橋大損、松平越前守様御屋敷大損

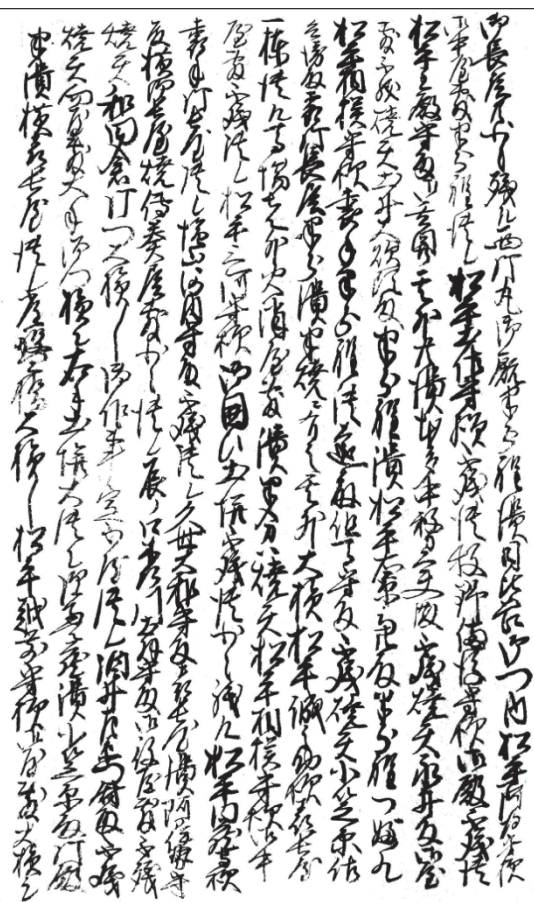


図 3. 本文 2 頁目の写真と読下文

Fig. 3. The second page of the document.

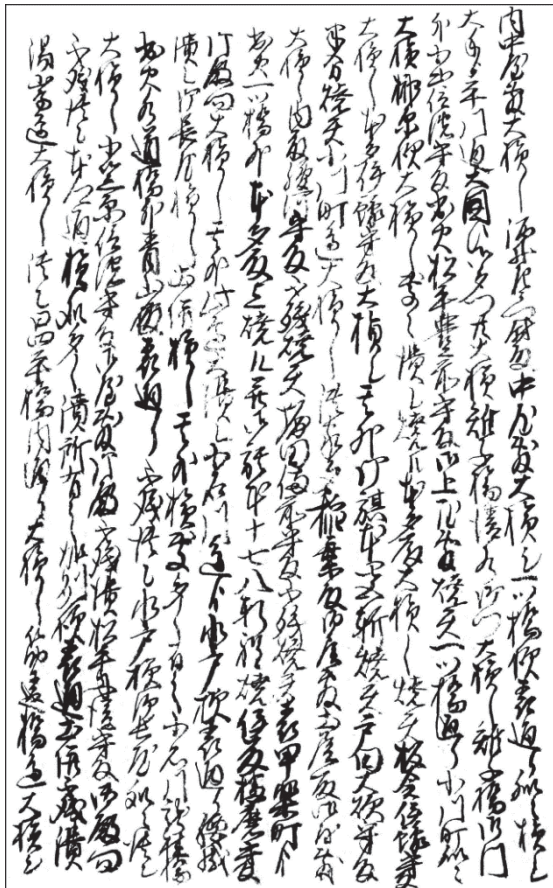


図4. 本文3頁目の写真と読下文

内中屋敷大損し、酒井左衛門尉殿中屋敷大損し、一ツ橋様表通り処々損し
 大手より平川通大囲ひ、御多門共大損、雉子橋・清水御門大損し、雉子橋御門
 外、小出信濃守殿出火、松平豊前守殿御上屋敷焼失、一ツ橋通り・小川町処々
 大損、榊原様大損し、處々潰し焼れ、本多殿大損し焼失、板倉伊豫守殿
 大損し、本多伊豫守殿大損し、其外御旗本四五軒焼失、戸田大炊守殿
 半分焼失、小川町辺大損し、潰家多、稲葉殿御屋敷・土屋殿御屋敷
 大損し、内藤駿河守殿不残焼失、堀田備前守殿不残焼失、表申楽町より
 出火、一ツ橋外本多殿迄焼れ、并御旗本十七八軒程焼、伊藤播磨守殿
 御殿向大損し、其外此辺大潰し、小石川辺より水戸様表通り腰掛
 潰し、御長屋損し、土塀損し、其外損處多く有之、小石川龍佳橋
 出火、水道橋外青山殿表通り不残潰し、水戸様御長屋処々潰し
 大損し、小笠原信濃守殿御屋敷御殿不残潰し、松平丹後守殿御殿向
 不残潰し、本郷通損處多く潰所有之、加州様表通土塀不残潰
 湯嶋辺大損し潰し、昌平橋内通り大損し、筋違橋辺大損し

Fig. 4. The third page of the document.

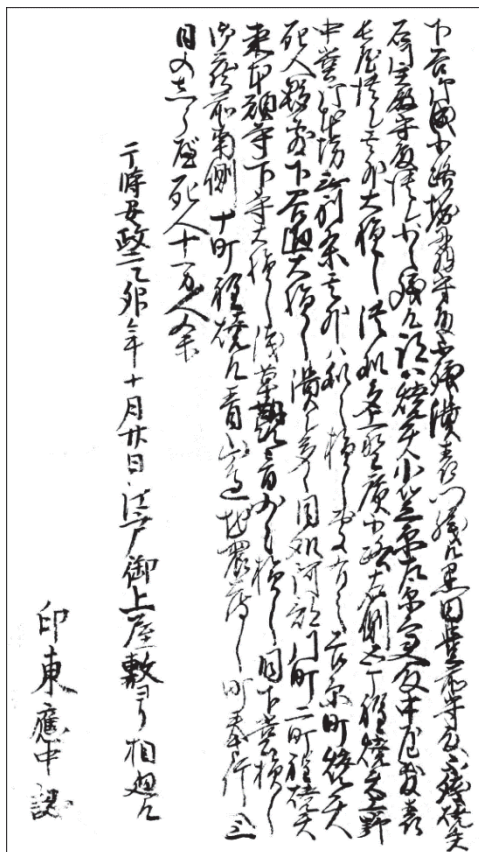


図5. 本文4頁目の写真と読下文

下谷御成小路、堀丹羽守殿不残潰、表門残れ、黒田豊前守殿不残焼失
 石川主殿守殿潰し、少々残れ、跡、焼失、小笠原左京大夫殿中屋敷、表
 長屋潰し、其外大損し、潰處多、上野廣小路、右側五丁程焼失、上野
 中堂御本坊無別条、其外、処々損し處有之、吉原町焼失
 死人夥敷、下谷通大損し潰し多く、同処阿部川町二町程焼失
 東本願寺下寺大損し、浅草観音少し損し、同下堂損し
 御藏前南側十町程焼れ、青山辺地震薄く、町奉行二三
 日のしらへ、死人十万人余

于時安政二乙卯年十月廿日江戸御上屋敷ヨリ相廻ル、
 印東應中 認

Fig. 5. The fourth page of the document.

表1. 印東家文書中の場所毎の被害（登場順）と現在の住所

Table 1. Place, damage, and the current address in the material

Area	Adress	Damage	Current Place
虎御門内	松平美濃守	表長屋一棟潰、其外處々損	霞ヶ関2
幸橋御門内	亀井隠岐守	少し焼	内幸町2
	伊 東 修理大夫	不残焼失	内幸町1
	松平時之助	不残焼失	内幸町1
	北條美濃守	少し焼	日比谷公園
	南部美濃守	不残焼失	日比谷公園
	松平薩摩守	御殿半分程潰、西表長屋一棟焼失	日比谷公園
	有馬備後守	不残焼失	日比谷公園
	丹羽長門守	玄閣潰	日比谷公園
	阿部播磨守	不残潰	日比谷公園
	松平肥前守	不残焼失	日比谷公園
	朽木(近江守)	御殿潰ル	日比谷公園
	小笠原佐渡守	半潰、表長屋潰	日比谷公園
	板倉周防守	半潰、表長屋潰	霞ヶ関1
	松平大膳大夫	西表土蔵潰、御殿半分潰	日比谷公園
外桜田通		土手石垣三ヶ處崩レ	内堀通り
西丸		西丸御囲土塀・石垣共拾ヶ處崩レ	内堀通り
		西丸大手脇櫓崩レ、土塀半崩レ	皇居内
		西御丸大手大損	皇居内
		坂下御門大損し	皇居内
	本庄近江守	表長屋半分程潰	皇居外苑
	牧野備前守	表長屋潰レ	皇居外苑
	松平玄蕃守	表長屋・玄閣潰レ	皇居外苑
	松平伊賀守	長屋半分潰	皇居外苑
内桜田御門通		御櫓・御多門崩レ、其外御櫓大損	皇居外苑
	松平下総守	不残焼失	皇居外苑
	松平肥後守	少し残ル跡者大凡焼失	皇居外苑
	内藤紀伊守	不残潰、表長屋焼ル	皇居外苑
	酒井雅樂頭	御殿不残潰、表長屋少し残ル	大手町1
	本多(越中守)	御殿潰レ、長屋共少し残ル	皇居外苑
西御丸	御厩	半分程潰	皇居外苑
日比谷御門内	松平阿波守	中屋敷半分程潰レ	有楽町1
	松平土佐守	不残潰	丸の内3
	牧野備後守	御殿不残潰	有楽町1
	松平主殿頭	玄閣其外共潰	有楽町1
	本多中務大輔	不残焼失	有楽町1
	永井(飛驒守)	屋敷不残焼失	有楽町1
	土井大炊頭	半分程潰	有楽町1
	松平右京亮	半分程つぶれ	有楽町1
	松平相模守	裏手半分程潰	丸の内3
	遠藤但馬守	不残焼失	丸の内1
	小笠原佐兵衛	表長屋半分潰、半焼二有之、其外大損	丸の内2
	松平誠之助	表長屋一棟潰ル	丸の内2
馬場先外	火消屋敷	潰、半分ハ焼失	丸の内2
	松平相模守中屋敷	不残潰レ	丸の内2
	松平三河守	御囲ひ土塀不残潰、少し残ル	東京駅
	松平内蔵頭	裏手長屋潰レ	丸ノ内2
	増山河内守	不残潰レ	丸ノ内2
	久世大和守	表長屋潰	丸の内1
	阿部伊勢守	横長屋焼	丸の内1
	傳奏屋敷	少し潰レ	丸の内1
辰ノ口表門	(松平)丹 波 守	御役屋敷不残焼失	東京駅
和田倉御門		大損	丸ノ内2

表1. 続き (continued)

Area	Address	Damage	Current Place
	御作事定小屋	潰レ	大手町1
	酒井左衛門尉	不残焼失	大手町1
	向屋敷・大手御門	損し、右手土塀大潰レ	大手町1
	御畳蔵	潰	大手町1
	小笠原(左京大夫)	御殿半潰、横表長屋潰レ	大手町1
	常磐橋	大損	大手町1
	松平越前守	御屋敷大損し、内中屋敷大損し	大手町2
	酒井左衛門尉中屋敷	大損	神田和泉町
	一ツ橋	表通り処々損し	大手町1
大手より平川通		大困ひ、御多門共大損	大手町1
		雉子橋・清水御門大損	北の丸
雉子橋御門外	小出信濃守	出火	神田神保町
	松平豊前守	上屋敷焼失	一ツ橋2
一橋通・小川町		処々大損	一ツ橋
	榊原(式部大輔)	大損し、處々潰レ焼ル	神田神保町
	本多(豊後守)	大損し焼失	神田錦町2
	板倉伊豫守	大損	神田錦町2
	本多伊豫守	大損	神田錦町1
	其外御旗本	四五軒焼失	神田錦町
	戸田大炊守	半分焼失	神田小川町
	小川町辺	大損し、潰家多	神田小川町
	稲葉(長門守)	屋敷大損	神田小川町
	土屋(采女守)	屋敷大損	神田小川町
	内藤駿河守	不残焼失	神田神保町
	堀田備前守	不残焼失	猿楽町
猿楽～一橋通	表申楽町より出火一ツ橋外本多迄焼ル并御旗本十七八軒程焼		神保町周辺
	伊東播磨守	御殿向大損、其外此辺大潰レ	猿楽町
小石川辺より	水戸(中納言)	表通り腰掛潰レ長屋損し土塀損し其外損	後楽1
水道橋外	小石川龍慶橋	出火	後楽1
	青山(大善亮)	表通り不残潰レ	本郷1
	水戸(中納言)	長屋処々潰レ、大損し	後楽1
	小笠原信濃守	御屋敷御殿不残潰	春日1
	松平丹後守	御殿向不残潰レ	春日1
本郷通		損処多く潰所有之	本郷
	加州(中納言)	表通土塀不残潰	本郷7
	湯嶋辺	大損し潰レ	湯島
昌平橋内通り		大損	昌平橋
筋違橋辺		大損	万世橋
下谷御成小路	堀丹後守	不残潰、表門残ル	外神田3
	黒田豊前守	不残焼失	外神田6
	石川主殿頭	潰レ、少々残ル、跡ハ焼失	上野1
	小笠原左京大夫	中屋敷表長屋潰レ	外神田5
	// (周辺)	其外大損し潰処多	外神田
上野廣小路		右側五丁程焼失	上野3
	上野中堂	御本坊無別条其外ハ処々損し處有之	国立博物館
吉原町		焼失、死人夥敷	千束4
下谷通		大損し、潰レ多く	下谷
阿部川町		二町程焼失	元浅草4
	東本願寺下寺	大損	西浅草1
	浅草観音	少し損し、同下堂損	浅草2
御蔵前		南側十町程焼 北?	柳橋 駒形?
青山辺		地震薄く	青山1

しかし本郷、上野、浅草、青山を日が短くなっている晩秋に一人で短期間に回れるとも考え難い。途中の町人地域の被害には一切言及がないことも、一人で実踏したことを疑わせる。地震後の2週間ほどの間に何回かに分けて実見したものに、藩邸或いは江戸城で伝聞した被害を加えて、関心が高かった武家地の被害状況と火災のあった場所に関して、十月二十日にまとめて記入した文書であると考えてよからう。

江戸で安政江戸地震を体験した弘前藩士が記述した『秘日記』[白石(2006)]と同様、幕府直参でない者が自藩の領地ではない江戸に関して被害を記述するという事は、必然的に他藩には見せるつもりがなかった、自藩あるいは自分用の覚え書きとなる。本史料中の全ての被害が全部確実とは言えないであろうが、石垣や堀周りの被害など、後に作事奉行を務めた人らしい記述も見られ、少なくとも江戸城の周辺部に関してはA級の同時代史料として扱える。

また、自身の居る川越藩邸の被害には言及せずに他藩の藩邸被害を書き記していることから、少なくとも火災や大きい倒壊被害が虎ノ門の川越藩上屋敷には発生しなかったと推定される。川越藩上屋敷の震度はこれまでの我々の作業で推定できていないのであるが、監察職が他所を多少なりとも見て廻れる状況だったということが、川越藩上屋敷の被害は、あったとしても震度5未満の軽微なものと推定される。

安政江戸地震の江戸での犠牲者数にはこれまで議論があるが[e.g. 中村・松浦(2013)], この文書では地震翌三日の町奉行の調べとして「十万人」となっている。夜中近く地震から明けて半日ほどで十万人の犠牲者の集計が当時の奉行所に可能とは思えない。地震から18日後に書かれているこの史料からは、地震後2週間程度の間には、奉行所でも死者多数という以上の信憑性の高い数字は持っていなかった、ということであって、決して犠牲者が実際に十万人居たということではなからう。史料に十万人とあるからと言って、史料の数字が正しい訳では無い。この史料から判ることは、幕府が江戸市中の犠牲者が大変多いという認識を地震直後から持っていた、ことである。

残念ながら今回の史料から、我々が最も得意とする震源推定に重要となるような、新たな地点の信頼度の高い推定震度を追加することはできなかった。また、これまでの推定震度を変更する必要も生じなかった。しかしこの史料には、江戸城周辺の武家地の被害状況が活写されている。また地震後18日間に幕府中枢部に極めて近い藩で集約できていた情報の有様が確認できると言う点で重要である。ここに本史料を公開して内容を広く残せることは、意義深い。

また、当時の幕府直属の武士ではなく、譜代の上級藩士として江戸に居た應中氏にとって、関心があったのは大名家の上屋敷や中屋敷、さらに藩にとって

は米蔵の他、札差なども立地して金融関係でも重要である蔵前の倉庫地域、そして吉原、浅草、上野といった当時の名所であることが推し量れる史料でもある。

§4. おわりに

今回は、新聞報道をきっかけに我々に史料の存在が判った。東日本大震災発生この方、歴史地震ブームであり、研究者に史料所有者が好意的に文書を開示してくれる場合も多くなっている。史料を使って研究する以上、宇佐美龍夫氏には遠く及ばないが、このような機会に閲覧できた史料に関しては、自分だけでなく多くの研究者が後日利用できるように、また史料の内容が残るように、今後も「資料」として内容を公表するように我々も努めて行きたい。会員各位も、新史料を閲覧できた場合には、自分が読むだけではなく、その史料の共有と保存・公開に各自寄与して将来の歴史地震研究に資する様に留意して頂くことを切望する。

謝辞

印東建夫氏には文書の存在をご連絡頂き、また公表を快諾して頂いたのが、ここに史料として残すことができた。また文書本文の図は早稲田大学山田眞教授が画像処理で文字部分を抽出して下さい。金田平太郎編集長および匿名査読氏の意見で本稿は改善された。記して感謝いたします。

対象地震：1855年安政江戸地震

文献

- 前橋市, 1973, 前橋市史第二巻, 711.
松浦律子・中村操・唐鎌郁夫, 2008, 歴史地震の震源域・規模の再検討作業-1718年伊那の地震など8地震について, 歴史地震, **23**, 143.
中村操・茅野一郎・唐鎌郁夫・松浦律子・西山昭仁, 2002, 安政江戸地震(1855/11/11)の江戸市中の被害, 歴史地震, **18**, 77-96.
中村操・茅野一郎・松浦律子, 2003, 安政江戸地震の首都圏での被害, 歴史地震, **19**, 32-37.
中村操・茅野一郎・松浦律子, 2005, 安政江戸地震(1855)の江戸市中の焼失面積の推定, 歴史地震, **20**, 223-232.
中村操・松浦律子, 2011, 1855年安政江戸地震の被害と詳細震度分布, 歴史地震, **26**, 33-64.
中村操・松浦律子, 2013, 安政江戸地震の被害と震源, 日本地震工学会誌, **20**, 2-7.
白石睦弥, 2006, 『秘日記』から見た安政江戸地震, 歴史地震, **21**, 19-35.